

現代社会における人間の欲望
—インド仏教思想を手掛かりとして—

石田尚敬（愛知学院大学）

要旨

本発表では、「人間とは何か—人間定義の新次元へ—」という課題を前に、古典学であるインド仏教思想研究からいかなる発信が可能か、先行研究を手掛かりとして考察したい。

1967 年に開催された日本佛教學會第 37 回学術大会において「仏教の人間観」が考察されてから、半世紀が経過している。当時の日本の社会状況を鑑みれば、1964 年に新幹線が開通し、東京オリンピックも開催されるなど、日本の経済成長を人々が実感する只中にあったと想像される。一方、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』が出版され、日本でも四日市ぜんそくが発生するなど、環境問題が意識され始めた時期にも重なっている。

その後、経済成長は成熟期を迎えた一方、環境問題は世界規模の課題として理解されるに至っているが、日本社会において、「人間観」ないし人間理解という観点から最も議論が重ねられた話題のひとつとして、1980 年代から活発に議論された「脳死」の問題を挙げることに異論はないであろう。

脳死および脳死からの臓器移植に関し、発表者の所属する愛知学院大学は、日本印度学仏教学会の「臓器移植問題検討委員会」が設置されていた経緯があり、脳死に関する議論がかなりの程度なされた現在において、改めてそれを振り返ることは無意味ではないと考える。現在、脳死判定基準（竹内基準）についての議論は一段落したように見えるが、仏教思想の立場から、「生への執着」が問題とされる一方、臓器移植でしか助からない（特に若い）人を前にして、臓器移植への反対を掲げることもできないという立場は依然共通して見られる。また、臓器提供を「菩薩行」（発表者は「利他行」の方が受け入れられ易いと考えるが）として評価する立場も存在する。

本発表では、中村元博士を初めとして、インド仏教研究から「仏教の人間観」について論じられた論考を振り返ることから始め、さらに、これまでに蓄積された脳死（および脳死からの臓器移植）の議論の中で、特に仏教思想の立場からの考察を取り上げたい。同時に、生命倫理ないし生命学という立場から脳死について鋭い考察を行っている森岡正博博士によって取り上げられた、「仏教研究者からの発信」に着目することで、仏教思想研究と今日の諸科学の対話の可能性についても考えたい。

本発表のタイトルに「人間の欲望」という語を使用したのが、発表者が注目したいのは、インド仏教思想における欲望についての取り扱いである。脳死からの臓器移植において人間の「生への執着」が問題とされることはもちろん、近年、研究者倫理に大きな問題提起をなした STAP 細胞問題を総括して論じ、脳死問題にも言及する櫛島次郎博士（『生命科学の欲望と論理』青土社、2015 年）も、「人間の欲望」、「科学の欲望」をキーワードに挙げており、古典思想と現代の問題を接続させるひとつの手掛かりになるのではないかと考えるからである。

キーワード：インド仏教、生命倫理、脳死